

杣に生きる

～考古学から何を視るか～

先日、当館敷地内にある『古代復元住居』^(※1)の改修に伴って、建築材である檜^{ひのき}の伐採、樹皮剥ぎ作業を行いました。場所は西都市銀鏡地区のとある山林です。

その山林は多くの檜が林立し、真夏日に関わらず涼しげな雰囲気は漂っていました。そこでは、普段、街中に住む我々が見ることのない、山と木に根ざした日常がありました。

『杣』という言葉があります。杣とは、古代、中世の日本で、国が所有した山林のことを指したり、伐採された木のことを指したりします。時は流れて、近世、近代になると林業を生業とする人の意味で用いられるようになりました。

子供の頃、山に入ると、山の傾斜を利用した幅2mも無いような道にしばしば出くわしました。それは普通の人を通るには急峻で、狭すぎ、でも確実に何か通った道なのです。後で分かったことですが、それは林業の方々が通ったり、山から伐採した木を降ろしたりするための杣道でした。

銀鏡地区の檜林と指導員の方々は、まさに現代に残る『杣』に生きていました。

さて、横道にそれたので話を戻しましょう。木の伐採作業は、安全を考慮して見学だけでしたが、樹皮剥ぎ作業は参加者全員で行いました(写真1)。樹皮剥ぎは、檜林で手頃な長さの枝を見つけ、先端を鋭角にした木製ノミを使用しました(写真2)。

ここで面白いのは、ノミの形状が作り手によって異なるという点です。ある指導者が作ったものは、片刃で柄が短く、もう一方の指導者が作ったものは両刃で柄が長いのです。それぞれ長所、短所があり、前者は細かい作業に適し、後者は大まかな作業に適しています。逆に用いると、これがなかなか難しい…

我々考古学に携わる者は、遺跡に残ったモノから生活なり社会なりを読み解こうとします。ただ、日本の土は有機物が残りにくいため、主に石器や土器、遺構からそれらを読み解きます。木製ノミを見た時、いったい普段手にする石器などは本来の姿をどれくらい反映しているのだろうかと考えてしまいます。もし、遺跡からこのノミが出てきたとしたら、おそらくは用途に言及したり、類似品から道具を使用する人々の

生活圏や時期を読み解いたりするでしょう。

しかし、この枠組みを広げた時、果たして我々にモノから『杣』が視えるでしょうか？

考古学に残された課題はまだ多いように感じます。

(沖野 誠)

※1 詳細は、前回のコラムを参照。



写真1 樹皮剥ぎ作業



写真2 木製ノミ